

Book Review

評者：高山義浩 沖縄県立中部病院地域診療科部長

迷って選んでためらって ケアするあなたの倫理学

著：金城隆展／発行：医学書院

定価：2420円（本体2200円＋税10％）



“正しさ”に疲れた医療者へ 日常で語る倫理という物語

日々の臨床で、私たちは患者さんに正しい情報を伝える、正しい理解のもとで選択いただけるよう努めている。けれど、地域の病院で高齢者と向き合っていると、そんな“正しさ”を空々しく感じてしまうことがある。自分で選んだはずのことを翌日には忘れてしまう方も少なくないからだ。

もちろん、こうした葛藤は患者さん本人の側にもある。認知症というレッテルを貼られることは、「適切な判断ができない」「病識が乏しい」といった含意がつきまとう。けれど、理解したい気持ちや、自分の人生を自身で決めていきたいという願いまで失われているわけではない。むしろ患者さんは、認知症にまつわる偏見との孤独な闘いを始めている。本人に意識がある限り、判断能力が完全に失われていることはない。嫌なことは嫌だと言えるし、どう生きたいかを語れる人も多い。治療法という「手段」は選べなくても、自分らしい生き方という「ゴール」を、彼なりの言葉で語ることはできる。しかし、私たち医療者は、ついアウトカム（結果）の適正さを急いでしまう。本当に大切なのは、そこに至るまでのプロセス（過程）ではないだろうか。悩み、迷い、選ぶ——そんな営みそのものが、治らない病を抱えて生きる高齢者の多い現代では、重要な意味を持ち始めている。

さて、本書はそんな悩み多き時代にあって、羅針盤

のように読者を導く一冊だ。もっとも、この本は読者を「正解」に導こうとはしない。むしろ、読者と「迷って選んでためらって」くれる。倫理には確固たる答えはない。その「答えのなさ」や「空白」そのものに意味がある——。そう言い切ってくれる著者の言葉に、不思議と肩の力が抜けていく。

本書には、臨床倫理のエッセンスが随所に散りばめられている。その中でも、私が心を動かされたのは、「物語は死をもって終わるわけではない」という視座だった。人が亡くなった後も、遺された私たちは、その人の人生を記憶し、語り継ぎながら生きていく。あるいは、認知症で語ることが難しくなった人でも、その人生の物語は、周囲との関わりの中で豊かに広がっていく。著者の言う「共同著作」として更新され続けるのだ。これは、もはや「科学」の領域ではない。でも、臨床の現場にいと、確かに実感させられることがある。著者は、私たちが抱くこうした漠然とした気づきを、丁寧な言葉にして手渡してくれる。若い医療者には、大切な気づきを促すものとなるだろう。

最後に……、何より読後感が温かい。詳細はネタバレになるため控えるが、本文をじっくりと味わった後に、ぜひ「おわりに」まで読み進めてほしい。「ああ、この人の倫理が温かい理由はここにあったのか」と、静かにふに落ちるはずだ。